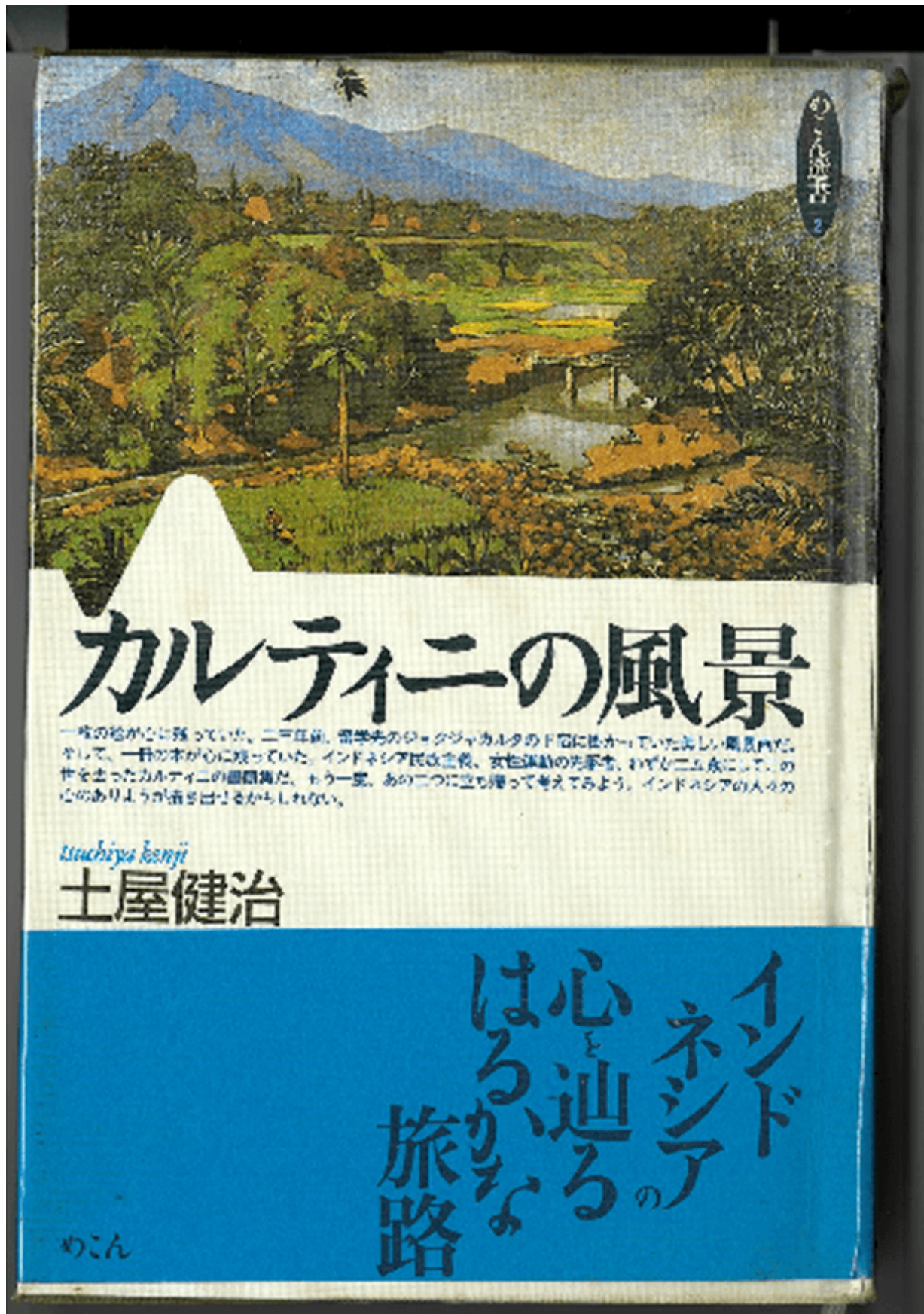


土屋健治 『カルティニの風景』

金 悠進

19世紀末の女性運動家カルティニを通じて、20世紀前半のインドネシア・ナショナリズムの夜明けを描く。その時代の風景とは、美しい熱帯の風景画が応接間に飾られ、社会の成員に共有されていく風景であり、クロンチョン音楽が時空間を超えて流行していく風景である。政治共同体としての〈インドネシア〉が姿かたちをあらわす前夜、このような文化現象が、カルティニの心象風景と重なりあい、ナショナリズムの通奏低音をなしていく。

一介のインドネシア音楽研究者として、私はクロンチョン音楽の考察にケチをつけたい。だが重要なのは、絵画や音楽といったナショナリズムとは一見無縁の文化がじつはその基層をなしているということだ。その実証には限界がある。なぜならこれは「ノスタルジア」だからだ。それはインドネシアにとってのノスタルジアであり、土屋にとってのノスタルジアでもある。土屋はこの「ラブレター」を綴るうちに、カルティニ、風景画、クロンチョン音楽から漂う情感を、「祖国インドネシア」へのノスタルジアの心性として結びつけていく。これは物語の域を超えて芸術であり、達人的な表現による名人芸である。



出典:

- 土屋健治『カルティニの風景』（めこん、[めこん選書2]、1991年）

関連リンク

- 土屋健治の生涯の研究関心をテーマに据えて、土屋健治にゆかりの深い人々が執筆した論集。
「特集《インドネシア国民の形成》—故土屋健治教授を偲んで—」 『東南アジア研究』 34巻1号、1996年 <https://kyoto-seas.org/ja/2011/02/tonan-ajia-kenkyu-34-1/>
- 土屋健治の生涯の研究関心をテーマに据えて、土屋健治にゆかりの深い人々が執筆した論集。
白石隆「追悼文：土屋健治会員のご逝去を悼む」 『アジア研究』 41巻4号、1995年、pp.119-120 https://www.jstage.jst.go.jp/article/asianstudies/41/4/41_119/pdf/-char/ja